

異文化における言語環境および言語学習に関する調査研究Ⅱ —多言語教育のあり方と動機づけを焦点に—

陳 惠貞

はじめに

グローバリゼーションの拡大に伴い、日本は完全に国際化社会になっている。国境を越え、日本に來ている数多くの外国人は、異文化の洗礼を受けている。それに加え、国際結婚が増えたために、子どもの言語環境と言語学習は複雑になってきている。国際結婚の割合が高くなっている中、日本人が外国人と結婚した場合、その間に生まれた子どもは、より複雑な言語環境におかれる。

また、外国籍でさらに夫婦ともに異なる国出身の場合は尚一層複雑になるが、外国籍で同じ国出身同士のカップルが日本で生活する場合、その子どもの言語環境も単純ではない。家庭内で自国語であっても、外では日本語環境になるためである。その子どもたちは言語発達の遅れがしばしば観察される。特に学校教育を受け始め、一般の子どもと一緒に学習し始めると、格差が現れる。さらに、学齢があがるにつて、格差がどんどん広がっていく傾向にある。家庭内の言語刺激が少ないというのが一因であり、その差は特に外国人労働者の子女に顕著である。外国人労働者は労働時間が長いうえ、家庭内での言語的な刺激やコミュニケーションが少ないことが知られている。親は日本語ができないために、日本でうまれた子どもに日本語による会話ができない。親子が一緒にいる時間が少ないので、母国語も育たない。親が子どもに対する言語刺激が少なくなり、子どもとのコミュニケーションが少ないという厳しい環境の中で、子どもの言語発達にまでひずみが生じてしまう。

劉・中田・吉田・栗山・陳（2010）は、在日外国人労働者の生活と子育て環境について調査をした。外国人労働者は夢を持って日本に出稼ぎにきた。その中の多くは長年日本に住んでいながら、日本語を話すことができず、日本文化の理解を深めず、長時間の単純労働を繰り返し、生活を送っている現状が浮き彫りになった。単純労働で職場を転々として、不安定な生活を強いられている。その中で、子育て環境や教育問題等さまざまな問題が露呈した。特に親の都合によって、一貫した言語教育を十分に受けられない子どもたちに、その後の人生にも多大な悪影響を及ぼすことが明らかになった。言語教育環境が乏しい状況におかれた子どもたちは、教育の格差がそのまま生活の格差につながり、悪循環の連鎖が断ち切れない。

一方、多文化・多言語環境のもとで、多言語教育が実現された事例もある。それを踏まえて、今回、子どもの言語レベルが高いと思われるもの、いわゆる成功例の親に調査依頼し、成功例としてとりあげることにした。子どもたちの言語学習の成果と多言語教育のあり方を探ることが本研究の目的である。

研究方法

質問紙による調査である。電子メールにより、質問紙を添付ファイルで送り調査依頼した。被験者によるメール返信で、質問紙を回収した。その後、内容を確認するため、電話によるインタビューを行った。

基本的な情報として、「調査期日、被調査者氏名、国籍、配偶者国籍、被調査者年齢、性別、子どもの年齢と性別」とした。具体的に、質問紙の調査項目と内容は以下の通りである。

1. 日本にきた動機（時期や費用など）、 2. 経過（どのように申請したのか）
3. 家族構成と住居の現状・環境、 4. 来日後の住居の変遷
5. 子育ての経過と学校教育（就学前教育を含めて）、 6. 職歴と現状
7. 今後の計画、 8. 子どもの将来について、 9. 直面している諸問題
10. 子どもの母国語の習得程度
「書く・読む・聞く・話す」のそれぞれを「支障なし・単語程度・全くできない」の3段階評価
11. 子どもの学習言語1の習得程度
「書く・読む・聞く・話す」のそれぞれを「支障なし・単語程度・全くできない」の3段階評価
12. 子どもの学習言語2の習得程度
「書く・読む・聞く・話す」のそれぞれを「支障なし・単語程度・全くできない」の3段階評価

今回、親の教育理念や子どもの言語環境に重点をおき、家庭環境を親の来日動機・経緯・仕事関係から推察することにした。個人情報保護のため、名前はイニシャルにし、学校名などはすべて匿名とした。そして、母国語と学習言語の判断は、被験者に委ねることとする。今回扱ったケースのうち、子どもの国籍は親の国籍と異なるものがあったからである。ケース1の女の子は父親が日本人で、母親が台湾人である。しかし、本人の国籍はアメリカで生まれ、アメリカ育ちの米国籍である。

さらに、子どもの学習言語と母国語の習得はどの程度であるかについて、「書く・読む・聞く・話す」のそれぞれを「支障なし・単語程度・全くできない」の3段階評価とした。

なお、ケース1の被験者は、現在東京在住であるが、長年日本を離れたため、質問紙に回答する際に日本語と中国語が混ざっていたので、部分的に筆者が翻訳した。念のため、原文を残した箇所があり、参照できるようにした。ちなみに翻訳したものは被験者本人により確認済みである。また、電話インタビューにより、質問項目の内容を理解しやすいように、調査内容に加筆した箇所がある。ケース2の被験者は、愛知県在住で、日本語が堪能なので、調査内容はすべて本人によるものである。以下、ケース・スタディーによる結

果の検討と考察を行う。

研究結果と考察

まずは、被験者情報の内訳として、表で示す。

表1 被験者の出身地・配偶者の国籍・子ども人数の内訳

出身地	配偶者		子どもの人数	
	同じ国籍	異なる国籍	一人	二人
台湾		○	○	
中国	○			○

ケース・スタディー1

調査日：2010年 11月 20日

被調査者氏名：Lさん（国籍：台湾、配偶者：日本人）

被調査者年齢：47歳

被調査者性別：女

子どもの年齢と性別：第1子 15歳、女

1. 来日した理由（いつ、どういうきっかけで、どういう目的で来日したのか。来日費用はどのように調達したのか）

1985年に私費留学生として日本にきた。当時、姉はすでに私立大学の留学生だった。留学の学費や生活費などすべて親が負担してくれた。1990年に結婚し、主人と一緒にアメリカへ留学にいった。その後、主人がアメリカで就職し、アメリカで生活を送った。今回の来日は、主人の仕事のためであり、主人の給料で来た。

2. 来日までの経過（どのように申請したのか。例えば、高校卒業してから留学の手続きをしたなど学歴を含む）

最初は姉が日本語学校を探してくれて、留学の手続きをしてくれた。留学生のビザできた。今回は、配偶者ビザで来た。主人は日本人だから、配偶者ビザを取得することができた。

3. 家族構成と住居の現状・環境（外国人集住地域か一般住宅地。または日本人の友人がいるかどうか）

主人、長女と3人家族。外国人多い地区に住んでいる。長女はいま一人でアメリカの

寄宿制の高校に在学中。

4. 住居の変遷（最初はどこに住んでいて、その後どこへ引っ越したか）

名古屋(1985～1990年)、アメリカ(1990～2004)、東京(2004～2005)、アメリカ(2005～2010)、東京(2010～現在)

5. 子育ての経過と学校教育（就学前教育を含めて）

（アメリカの）小学校、公立中学校、私立高校

2004～2005年に来日したとき、アメリカン・スクールに通わせた。2005年にアメリカへ戻ってから、一貫してアメリカの教育を受けようと長女が自ら決心し、いま一人でアメリカの寄宿制の高校に通っている。

6. 職歴と現状

教育、通訳、通信業、家庭主婦

（電話インタビューによる確認により、被験者と被験者の配偶者はともにアメリカで修士号を取得した。）

7. 今後の計画（日本に定住するか帰国するか、または他の国か）

アメリカ帰国。

実際に今後どこに住むかは問題がない。子どもがすでに自立している（経済的な問題以外）ので、親はどこに住むかはさほど子どもに影響を及ぼさないと思う。もちろん、親として未成年の子どもに経済的な援助が必要である。子どもが経済的に自立するまで、親は子どものことを第一に考えてあげ、支えてあげないといけない。

（原文）

以後住在那裡？小孩已經自立了（除了經濟之外），家長住在那裡已經對小孩不會造成任何影響。以小孩為主？經濟上，小孩需要家長的支持，所以，在小孩經濟獨立之前，家長在經濟上會以小孩為主，為他們付出。

8. 子どもの将来について（親の教育理念と子どもの希望を含めて）

子ども自身はアメリカでお医者さんになりたいと言っている。親として、子どもの人格（一人の人間として正しい行いができる）が良ければ、どんな業種でも良い。

なぜ多言語教育を受けることが大切かというと、国際社会に身をおき、仕事の領域の中で、自分の専門以外、語学能力は武器であるから。早いうちに、子どもに多言語の基礎が備わると、子どもにもう一つ仕事の能力を創り出すことになる。それはより多くの人々を助けることにつながる。

(原文)

為甚麼要實施多語言教育？身在國際社會，在工作領域裡，除了自己的專業之外，語言能力是一個利器。讓小孩提早具備多語言基礎會幫助他們創造多一份工作能力。具備多一份工作能力就能幫助更多的人。

9. 直面している諸問題（子どもの教育を中心に、または親の仕事を中心に）

子ども中心に考えている。

私はどのように子どもに言語環境を用意したかについて、基本的に、私の考え方とやり方は、まず子どもは必ずしも多言語の国に住むとは限らず、親は家庭において、子どもに多言語的な環境を創り出すことができると考えている。例えば、父親は子どもに日本語だけ話す、母親は中国語だけ話す、そのほかテレビの視聴・読書・映画観賞・歌を歌う・・・などで、子どもにもう一つの多言語環境を提供することができる。それゆえ、どこの国に住むのは重要ではない、一番大事なのは親が最後まで頑張り続けることであろう。もちろん、親ができなかった、あるいは時間がなかったことで、外部の力による助けが必要となる。例えば、家庭教師を雇うか、または語学学校に頼る・・・言語学習は早ければ早いほどいい。

言語の学習は持続力と我慢強さが必要である。親は子どもにイキイキとした面白い言語環境を創り出せば、ただそれさえあれば子どもに言語学習に興味湧いたら、自然と続けて学習していく。子どもにとって、学校にいる時間が最も長い、だから、多言語教育の学校を見つけてあげることがベスト。

(原文)

我怎麼幫小孩創造語言環境？基本上，我的看法和做法是，孩子不一定要住在一個多語言的國家。我們家長可以在家幫小孩創造多語言的環境。

譬如說，爸爸只跟小孩說日語，媽媽只跟小孩說中文，另外再以看電視，讀書，看電影，唱歌。。。等等來創造另一個語言環境。所以說，住在那一個國家並不是最大的關係。主要是家長要堅持到底。。。當然，若是家長不知道或沒時間教小孩的話，他們就需找外來的幫助了。例如找家教或找語言學校。。。最好讓小孩越早學語言越好。

語言的學習需要持續和耐心，只要家長幫小孩創造一個活潑有趣的語言環境，讓小孩對語言的學習產生興趣，他們就會繼續學習。小孩在學校的時間最長，所以如果家長可以找到同時以多語言來教學的學校的話，是最好不過的。

10. 子どもの母国語（英語）の習得はどの程度

書く：

支障なし

・ 単語程度 ・ 全くできない
読む：

支障なし

・ 単語程度 ・ 全くできない

聞く： ・ 単語程度 ・ 全くできない
話す： ・ 単語程度 ・ 全くできない

11. 子どもの学習言語 1 (中国語) の習得はどの程度

書く： 支障なし ・ ・ 全くできない
読む： 支障なし ・ ・ 全くできない
聞く： ・ 単語程度 ・ 全くできない
話す： ・ 単語程度 ・ 全くできない

12. 子どもの学習言語 2 (日本語) の習得はどの程度

書く： 支障なし ・ ・ 全くできない
読む： 支障なし ・ ・ 全くできない
聞く： ・ 単語程度 ・ 全くできない
話す： ・ 単語程度 ・ 全くできない

考察：インタビューのデータとつき合わせて考察してみると、被験者のLさんは教育専攻の勉強をしたので、多言語教育環境について、徹底的に実践したようである。家庭内の言語教育について、子どもに父親は日本語だけ話し、母親は中国語だけ話す。一步外へ出ると、学校教育など外では英語環境である。そのほかに、テレビの視聴・読書・映画観賞・歌を歌うことなどで多様な多言語環境を整えた。また、無理強いすることなく、楽しくイキイキとした言語環境のもとで、子どもによる言語学習の動機づけの立場から、申し分がないことが明白である。

親が自然体で、多言語環境を用意したことで、それによって、子どもが自然と自ら楽しく学習しているようである。子ども本人が寄宿制私立高校を希望し、難関を突破して入学したそうである。15歳という年齢で高校生と聞き、違和感があったので確認をした。アメリカでは飛び級制度があり、成績優秀な子どもが進級できるので、本被験者の娘がその制度によって高校生になったわけである。子ども自身が大変自立心があり、自らの学習動機が高いレベルにあることは言うまでもない。

アメリカに自宅をかまえているので、一応アメリカ帰国と答えたそうである。その一方、子どものことを第一に考えている様子から、将来どこに住むかは、自分の都合ではなく、子どもを中心に動くように感じられた。

子どもの母国語は英語であり、飛び級ができたほどなので、年齢に相応して高いレベルの語学力を備えていると思われる。ただ、学習言語1の中国語と学習言語2の日本語のレベルはともに、「聞く」「話す」レベルに止まり、漢字を書くのが得意ではないようである。

しかし、子どもの母国語がしっかりしていれば、論理的な思考の発達に支障もないし、いまの段階では全然問題がないであろう。そして、彼女自ら強い意志で自国において一貫した教育を受けることが決断できるぐらいしっかり者なので、将来が楽しみである。

ケース・スタディー 2

調査日：2010年 12月 11日

被調査者氏名：Sさん（国籍：中国、配偶者：中国人）

被調査者年齢：47歳

被調査者性別：女

子どもの年齢と性別：第1子 21歳、女

第2子 12歳、女

1. 来日した理由（いつ、どういうきっかけで、どういう目的で来日したのか。来日費用はどのように調達したのか）

主人は国費留学生として、1992年に来日したため、私も1994年1月に日本にきた。留学のため来日したので、1994年4月に国立N大学の研究生として入学した。日本に来る前、主人も私も中国の大学の教員で、10年ほど働いたため、少し貯金があるので、この貯金は来日の費用になった。

2. 来日までの経過（どのように申請したのか。例えば、高校卒業してから留学の手続きをしたなど学歴を含む）

中国改革開放の政策のお陰で、主人は中国文化大革命終了後の第2回大学生となり、私は第4回大学生として大学卒業してから、直ぐ大学の教員（助教）になった。あの時の若い教員達は誰でも勉強心は旺盛で、能力をもって高めるために、仕事をしながら大学院進学の準備をしたり、国外の大学へ行くため英語を一生懸命勉強したりすることは当たり前のように行っていた。私達もこの中の一員として同じようなことをしていた。ただし、あの時の中国には、いろいろな規制があるため、国外へいくのはそう簡単なことではなかった。多くの紆余曲折を経て、10年ほど働いてから、主人は試験を受けさせてもらい、優秀な成績を収め、日本に来る国費留学生の資格を得たので、やっと留学のチャンスを掴んだ。

3. 家族構成と住居の現状・環境（外国人集住地域か一般住宅地。または日本人の友人がいるかどうか）

私達夫婦と二人の娘を持つ4人家族である。一般の住宅地のマンションに住んで、日本人の友人もいる。

4. 住居の変遷（最初はどこに住んでいて、その後どこへ引っ越したか）

最初、主人は国立NK大学の留学生寮で一年間住んでいた、私と長女が来てから、大学の近くの古くて狭い4階のマンションに5年間住んでいた。そして、主人が公立A大学の教員になってから、大学の教職員寮で5年間住んでから住宅ローンを組んでマンションを買い、今では6年目になった。

5. 子育ての経過と学校教育（就学前教育を含めて）

①第1子

中国で生まれ、1歳になってから、務め先の大学の幼稚園に入園し、漢字、漢詩、歌などを少し学んだ。6歳になってから来日し、小学校一年生から小学校卒業まで日本で過した。小学校を卒業してから中国へ帰国した。中学校一年から高校卒業まで中国の上海で生活してから、また日本に来て、日本の大学に進学し、今は関西地方の国立K大学の3年生である。中国にいた中学校と高校の時にも、毎年夏休みに日本に来て、そして中国にいる時もよく日本のアニメーションをみるから、基本的に日本語の環境から離れていないので、高校三年のとき、日本語能力試験1級を受け、400満点の中で、370点以上を取ることができた。

②第2子

日本で生まれ、3歳になってから、日本の保育園に入園し、平仮名、漢字、歌などを少し学んだ。4歳～5歳の間、中国上海の幼稚園で一年過し、中国の漢字と歌なども少し学んだ。5歳になってから、ずっと日本に過している。今は中学1年生である。中国語を忘れないように、中国語のアニメーションを見せたり、夏休みや冬休みの時、中国の祖父母の所に帰らせたりしているので、日本語ほど流暢ではないが、中国語は普通に使える。

6. 職歴と現状

1984年7月から1994年1月まで中国の大学で勤めた。1994年4月から1995年3月まで国立N大学の研究生を経て、2000年4月～2002年8月まで別の国立NK大学の研究員で、2001年9月から現在まで、日本の私立大学で勤めている。現在は大学の教授である。

7. 今後の計画（日本に定住するか帰国するか、または他の国か）

5年前日本の永住のビザを取ったし、仕事もあるため、定年まで日本に定住するつもりである。

8. 子どもの将来について（親の教育理念と子どもの希望を含めて）

将来アメリカなどへ留学させ、中国の良さと日本の良さを知ったうえ、アメリカや他の国の良さも知ってもらい、自由平等の思想や生きる喜びを感じる力と困難に直面する力を持つ、優しくてたくましくて思いやりがあり、独立と健全な人格がある明るい国際人になってほしい。

9. 直面している諸問題（子どもの教育を中心に、または親の仕事を中心に）

いじめ問題：二人の子供とも日本の小学校でいじめられたことがあるが、子供や先生とよく話し合ったため、直ぐ問題が解決できた。

言葉の問題：長女は6歳になってから日本に来たため、最初の半年は大変だった。日本語ができるようになってから、中国語を忘れないように、週に一回中国語学校を通わせ、毎日簡単でもいいから中国語で日記を書かせ、家でもなるべく中国語を話すようにいろいろな工夫をした。次女は中国語で日記を書いていないが、中国語の宿題をしているので、日本語と中国語ともできる。

漫画とゲーム：二人とも勉強ができるほうだが、勉強より漫画を読むことが好き、ゲームにもハマっているので、勉強の時間と好きなことをやる時間のバランスを取るのはとても大事だと思う。勉強がよくできたら、好きなことをご褒美として 30 分程度でさせるなど、しかし、上手いいかないときもある。子供一人で留守の時、勝手放題に漫画を読んだり、ゲームも好きなままですらったりすることもある。自分を自律することが子供にとって難しいことだが、成長に伴って自律するのは必要なことを学んでもらいたいので、今後の課題でもある。

10. 子どもの母国語（中国語）の習得はどの程度

書く：（支障なし） ・ 単語程度 ・ 全くできない

読む：（支障なし） ・ 単語程度 ・ 全くできない

聞く：（支障なし） ・ 単語程度 ・ 全くできない

話す：（支障なし） ・ 単語程度 ・ 全くできない

11. 子どもの学習言語1（日本語）の習得はどの程度

書く：（支障なし） ・ 単語程度 ・ 全くできない

読む：（支障なし） ・ 単語程度 ・ 全くできない

聞く： 支障なし ・ 単語程度 ・ 全くできない

話す： 支障なし ・ 単語程度 ・ 全くできない

12. 子どもの学習言語 2 (英語) の習得はどの程度

書く： 支障なし ・ 単語程度 ・ 全くできない

読む： 支障なし ・ 単語程度 ・ 全くできない

聞く： 支障なし ・ 単語程度 ・ 全くできない

話す： 支障なし ・ 単語程度 ・ 全くできない

(長女の英語レベルは中以上程度で、次女は中学校一年生程度なので、このくらいのレベルなら、支障なし)

考察：Sさんは配偶者とも大学教授であり、子どもへの教育理念が明確的であり、目標も高いようである。夫婦共働きではあるが、子どもの多言語教育環境として、家庭内では母国語で会話するように努力しているようである。また、このケースでは、自国の親のバックアップやサポートも多言語教育環境の一環として重要な役割を果たしている。

Sさんは強い信念の持ち主で、異文化の中で柔軟に子育てができるような聡明な方だと見受けた。娘への愛情が深く、冷静で計画性がある。Sさんの長女は6歳まで母国語をしっかりと学び、小学校1年から6年までの小学校の基礎教育を日本で受けた。小学校卒業後、自国に帰国し、中学校と高校の6年間初中高教育を受けた。親が日記を書くことを長女に要求することによって、その後の自国での中学校と高校教育に支障なく適応し、受け入れることができたと思われる。これは異文化間コミュニケーション(陳, 2008)の調和が巧くとれている良い例である。その後、家族の住む日本に来たと思われるが、関西地方の国立大学に受かり、現在大学3年生、一人暮らしだという。このケースの子どもも大変自立しているようである。このように、計画的かつ区切りよく、バランスよく均等に母国語と学習言語を受けられるのは珍しい例である。娘への深い愛情と冷静な判断力、そしてしっかりした教育理念を持ったからこそできたものだと思う。しかし、これは計算高い計画性によるものではなかったようである。実は、子どもが制服のスカートを嫌がり、自ら帰国することを決意したそうである。このケースの大人たち(両親と祖父母)が子どもに対するサポート体制を整えていることに大変感心させられた。親子のきずなと互いの

信頼関係があったからこそ可能となったことだと思う。また親として、子どもを自立させる勇気と気持ち上の余裕や経済的な余裕を感じさせられた。子ども側のほうについて、全く抵抗なく親元を離れ自立するという勇気ある行動にも感心した。「中国語を忘れないように、週に一回中国語学校を通わせ、毎日簡単でもいいから中国語で日記を書かせ、家でもなるべく中国語を話すようにいろいろな工夫をした。次女は中国語で日記を書いていないが、中国語の宿題をしているので、日本語と中国語ともできる」というように、共働き夫婦が日々子どもたちの言語環境作りや言語教育に励む姿が目に見え、感服した。

被験者Sさんの長女と次女の語学レベルはともに母国語は中国語であり、学習言語1の日本語と学習言語2の英語のレベルは年齢に相応したものと評価された。それにしても、「聞く」と「話す」は普通にできるとしても、「書く」と「読む」ことは支障なしのレベルに達したことは容易ではない。親子ともども、日々の努力は素晴らしいものだと評価せざるを得ない。今後、子どもたちの母国語の学習内容を年齢のレベルに沿った語彙や表現力の習得を伴い、「書く・読む・聞く・話す」ことをバランスよく伸ばしてあげれば、トリリンガルになることに違いない。

まとめ

前回、陳（2010）は「三項関係」[※]が言語習得における動機の原点と指摘した。つまり、「わたし」と「話したい思い」と「話したい相手」の「三項関係」は、話したい思いがあり、話したい相手がいることこそ、会話が成立し、言語を学習する動機づけになる。前述した単純労働の外国人労働者の子どもたちは、母国語と学習言語の習得に大変不利な状況にあることが知られている。親世代の長時間単純労働により、多言語教育はいうまでもなく、家庭内による母国語の会話でさえ、物理的に（時間的に）無理があった。親子の会話が成立しないと、子どものその後の言語発達と他人とのコミュニケーションに支障がでる恐れがあると推測できる。その結果、母国語も学習言語も育たない、いわゆる「ダブルリミテッド・バイリンガル」の子どもたちが生まれ、多くの問題に直面している。調査により、子どもが加齢につれ学習言語の獲得につまずきがあると、学業不振に陥り、不登校に発展してしまったり、不良になってしまったりする場合がある。さらに、周りの子どもと十分にコミュニケーションをとれず、いじめにあったものもいる。このように、親世代の低賃金・長時間な単純労働から脱出するために、世代間の悪循環を断ち切るためにも、言語によるコミュニケーションが必要である。自国の言語はもちろん伝承していかなければならないが、せつかく日本にきたから日本の文化にふれ、日本語をマスターし、仕事に活かせるようにすれば、もっと地域社会に融けこみ、低賃金・長時間な単純労働から脱出することができるかもしれない。しかし、日本に生活している次世代には「三項関係」によ

[※] 「三項関係」について、石井（2004）に参照すること。

って、親とコミュニケーションをとる動機があるとしても、元々第二言語に対する学習動機が弱いことが推察できる。このように、元々「弱い動機」で始めた言語学習はなかなか身につかないことが予想できる。Bialystok & Hakuta (1994 重野訳 2000) は『外国語はなぜなかなか身につかないか』に述べたように、言語学習は「脳、言語、心、自己、文化」の生態的な環境を構成し、その全体のアプローチである。次世代の母国語や学習言語を動機づけるのは、まさに生態的な環境の中の中心である「心」にある。子どもが自ら意欲的に目的意識をもち取組めば一番理想である。自発的な子どもには、自らの意思決定で動くことができるが、そうではない子どもには親の多言語環境・教育の取り組みが必要になる。

今回の被験者はいずれも高学歴という特徴がある。さらに、子どもに対する多言語教育が熱心であり、しっかりした教育理念を持っているという共通点がある。本研究で取り上げた2つの成功例をみると、親世代がもともと「留学」という動機で日本にきた。異文化の中で、測り知れないいくつかの困難を乗り越え、現在に至った。子育てや子どもの多言語教育にも大変苦労をしたようである。悩みつつも子どもの多言語環境・教育を工夫し、土台を作り上げたわけである。これらのケースに即していえば、「留学」と「出稼ぎ」という異なった目的や動機で来日したが、次世代には教育の格差がそのまま生活の格差につながる悪循環の連鎖がここで断ち切られるであろう。

ケース2にあるSさんの長女のように、自国で6年間母国語（第一言語）を習得したあと来日した外国人の子どもについて考えてみたいと思う。母国語と学習言語の優位性について、研究者の間でもかなり意見が多岐に分かれる。すでに母国語を十分に使用することができる時のみ、子どもは第二言語の能力を十分なレベルに到達させることができるという Cummins (1979a, 1979b, 1981) の発達相互依存仮説が有力であった。Sさんの長女は6歳で来日し、日本で学習言語の基礎にあたる6年間の教育を受けた。その後、中学と高校の6年間で自国で教育を受けたそうである。計画的に6年間一区切りで交互に母国語（中国語）と学習言語（日本語）、またその間第2学習言語（英語）を習得した。繋ぎ目にはきっと適応の期間がしばらく続くであろう。それにしても、大変な我慢強さと勇気のある持ち主であると評価せざるをえない。21歳にしては、これまでの中国と日本の教育や生活の往復について、適応能力が大変優れているようである。そして、ケース1にあるLさんの長女は、15歳にして自ら志望校に受験し、飛び級で見事に合格し、一人アメリカで寄宿制の高校で勉学中である。この2つのケースの共通点として、子どもが自ら決める、決めた以上は頑張るという決断力と潔さにある。親が無理強いすることなく、これこそが自ら湧き出てくる内発的動機づけといえよう。

脳科学者の川島（2003）は母国語と外国語を使用しているときに脳を測定すると、バイリンガルとそうではない人の脳の反応が異なることを立証した。さらに、実際にバイリンガルの中には、母国語の取得ができていない人もたくさんいる事実をあげ、どの段階で外国語を学習すればよいのかは、定論がないことを指摘した。バイリンガルであるかどうかは、母国語と学習言語のレベルの問題が存在することについて陳（2010）は、すでに指摘

した。挨拶程度で済むならば、大勢の人々がバイリンガルとして認定されることも考えられる。しかし、ハイレベルの言葉を理解し、母国語と学習言語の両方で「書く・読む・聞く・話す」の各段階をクリアできるバイリンガルは少なくなる。まして、今回取り上げた2つのケースに、トリリンガルのたまごが存在している。ケース・スタディーの中で、親世代は母国語をしっかりと習得した上で、強い学習動機で、困難を乗り越え異国で成功し、子育てをしているわけである。前述した「三項関係」が示すように、今回の研究によって、被験者ら親子の愛情ときずなの強さが、子どもたちの学習に動機づけたように感じた。今後多言語教育が展開していくと思われるが、その中で、ここらとつながる「動機づけ」は源であり、大きな力になるに違いない。多言語教育のあり方について、なお課題が多いが、今後も更なる発展を遂げることを期待したい。

参考文献

- 陳 惠貞 (2008). 「子どもの言語発達と異文化における多言語教育」 愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会『言語文化』第16号, 5-15.
- 陳 惠貞 (2010). 「異文化における言語環境および言語学習に関する調査研究—動機づけの視点から考えて—」 愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会紀要『言語文化』第18号, 37-49.
- Cummins, J. (1979a). *Cognitive/Academic language proficiency, linguistic interdependence, the optimum age question and some other matters* Working papers on Bilingualism, Vol.19, 121-129.
- Cummins, J. (1979b). *Linguistic interdependence and the educational development of bilingual children* Review of Educational Research, Vol.49, 222-251.
- Cummins, J. (1981). *The role of primary language development in promoting educational success for language minority students* in Office of Bilingual Bicultural Education(eds.), *Schooling and language minority students: A theoretical framework*, pp.3-49, California State Department of Education, Los Angeles, CA.
- Ellen Bialystok & Kenji Hakuta (1994). *In other words - The science and psychology of second-language acquisition* BasicBooks, A division of Harper Collins Publishers, Inc.
- (エレン・ビアリストク & ケンジ・ハクタ 重野純 (訳) (2000). 外国語はなぜなかなか身につかないか—第二言語学習の謎を解く 新曜社)
- 石井 正子 2004 「三項関係」 『教育心理学』 樹村房, p.8, p.187.
- 川島 隆太 2003 「母国語と外国語」 『子どもを賢くする脳の鍛え方』 小学館, 149-151.

劉郷英・中田照子・吉田幸恵・栗山陽子・陳惠貞 2010 「在日外国人労働者家族の生活
と子育て環境に関する調査研究」 環境経営研究所『環境経営研究所年報』第 9 号,
39-49.